平成 24 年 2 月 1日
第 57 号

やかたばら環境通信

◇◇ 発行 ◇◇
八方原の環境を守る会
代表 原田憲一郎
電話 972・7602

見直されつつある従来のスタイル



まだ暗いうちからたくさんのお客さんが列を作る朝市

八方原朝市が今年も元気にスタートしました。まだ暗い夜明け前から多数の常連さんが駆けつけて、たき火をし、お茶を沸かして楽しそうに歓談していました。常連さんにとってのお目当ては新鮮野菜だけではなく、このふれあいにもあるかもしれません。

ところで以前に八方原ファンクラブというユーザーグループに生産品を提供していたことがありました。この方式が欧米や日本国内の大消費地に近いところで見直されています。CSA (Community Supported Agriculture) と呼ばれるこの方式は消費者が予め会費などの形でお金を払い、それに見合う生産物を優先的に確保するという仕組みです。

機械化作業で順調に進む麦作

農事生産組合八方原が麦作に取り組んで2年目となりました。今期は植え付け面積も大幅に増やし、本格的な生産に向けての助走を始めました。

麦は冬を越して強く大きくなります。しかもすこし痛めつけるようにしていくほど良く育つといわれています。昔はわざわざ足で踏んでいたものでした。

今は、管理機と呼ばれる機会で適切な泥掛けなどを行い健やかな麦の育成を促しています。


畝をまたいで麦に泥掛けを行う管理機

完成した農業倉庫


頑丈な鉄骨で構成され、コンクリート床となった倉庫

農業生産組合八方原では農業機械を安全に保管するために倉庫建設を進めていました。年明け早々に工事も終了し、電気や水道なども設備されました。

これは山口市の農業生産組織活性化促進事業の助成を受けて建設されました。国県や市は農業を組織的に行う団体組織を支援する方針を決め、さまざまな事業を展開しています。

この倉庫の広さはおよそ１００平方メートルほどあり、洗車場も作られています。今はまだ数台の機械しか入っていませんが、もう暫くすると農業機械でいっぱいになるでしょう。

この通信は http://www.harataco.org/sigeki/ で読むことができます

チームハッポウ襷をつなぐ

八方原有志主体のチーム市山口駅伝大会に挑戦

1月15日、第7回山口市駅伝競走大会が阿知須きらら博記念公園特設コースで行われ、「チームハッポウ」は一般1部に出場、25位でゴールしました。

大会には165チームが参加し、5区14・7㎞のコースに挑みました。今年から一部コースが変更になり、距離も1㎞ほど延びました。



競技終了後、選手と関係者で笑顔の一枚

チームハッポウの1区はスピードに定評のある国本康喜選手、1キロ3分35秒ペースの快走で2区の藤永典子選手に襷をつなぎました。藤永さんはマラソンや駅伝は初めて、下関市菊川の出身ですが、マラソンを走ってみたいという願いで今回の挑戦となりました。ぶっつけ本番のような状態でしたが、3区の国田純一選手につなぎました。

国田君は厳しい練習をこなして、年々速くなっており全体でも18番目という素晴らしいタイムで順位を押し上げ、4区の原田昌通選手に託しました。

昌通君は後半すこし疲れましたが、必死の追い込みでアンカーの原田広文選手に襷を渡しました。直後にコース横の芝生に倒れ込んでしまいました。必死の追い込みが体力の限界に近づいていたのでしょう。暫くすると呼吸も戻り、事無きを得ましたが、駅伝の持つ魅力と怖さが垣間見えました。

アンカー広文君の軽快な走りは、いつもと相変わりません。ドームで待つチーム員と関係者の前で堂々のゴールを切りました。

選手の皆さんご苦労様、応援の皆さん、ありがとうございました。



▶練習の成果を発揮、1区の国本選手



▶ますます力をつけてきた3区国田選手



▶厳しい状況を乗り越えた2区藤永選手



▶中継所に飛び込む4区原田昌通選手



▶ゴール前、ピッチの上がる原田広文選手